

活動報告書

報告者氏名：鈴木康之 所属：埼玉県立大宮北特別支援学校 記録日：2013年2月27日

【対象児の情報】

- ・ 学年

小学部4年 男児

- ・ 障害名

広汎性発達障害

- ・ 障害と困難の内容

障害名は広汎性発達障害ということになっているが、さまざまな面に関しこだわりが強く、知的な遅れを伴った自閉症と言っても差し支えないくらいである。その障害の程度は中度（療育手帳B、その他の標準検査の記録はない）で、表出言語として助詞のない二語文や三語文を話すこともある。指示理解も比較的良好である。対象児からの一方的な要求は多いが、会話はほとんど成り立たない。対象児の発する断片的な言葉を大人がいろいろ汲み取って解釈し、ようやく意思疎通が図れる状況である。

学校生活の流れは十分理解しているものの、年度当初の困難さはその場面間の移行において、「やなの！」と強く拒否することであった。特に、構造のない自由遊びの場面から構造のある学習場面への移行は大変困難であった。周囲の大人は、「早く次の活動に移ってほしい」とやきもきするものの、それを促せば促すほど一層頑なに拒否するのであった。

【活動目的】

- ・ 当初のねらい

学校生活における場面間の移行をスムーズにする。

- ・ 実施期間

平成24年5月～25年2月

- ・ 実施者

鈴木康之

- ・ 実施者と対象児の関係

実施者は担任外の自立活動専任教員であり、対象児のクラスの時間における自立活動の授業を担当している。このクラスは4名の男児が所属しているが、対象児はそのうちの一人である。週2回50分の個別抽出型の自立活動のセッションを行っている。

活動内容と対象児の変化】

・対象児の事前の状況

学校生活における場面間の移行の際に、「やなの！」と強く拒否し、担任を含めどんな大人がなだめてもすかしてもなかなか動こうとしなかった。

・活動の具体的内容

I 期（平成24年5月～6月）

紙ベースの絵カード（PECS：「絵カード交換式コミュニケーション・システム」の物）を用いて、特に移行が難しかった登校時から朝の会までの短いスパンでのスケジュールを提示してみた。

II 期（平成24年7月～9月）

I 期と同じスパンのスケジュールを、アプリ「たすくスケジュール」（たすく株式会社）に置き換えて、iPad 上で画像によるスケジュール表を提示してみた。

III 期（平成24年10月～平成25年2月）

II 期より長いスパンで、学校生活のスケジュールを提示してみた。あわせて、アプリ「Drop Talk」を使い、50分×週2回の個別抽出型の自立活動の時間において、活動を選択させることを試みた。

・対象児の事後の変化

I 期

紙ベースの絵カードでも、上記の短いスパンでの移行は比較的スムーズになった印象を受けた。

II 期

iPad に非常に興味を示し、画面上の絵（写真）カードをスクロールさせては楽しんでいた。この時期には、上記の短いスパンにおける移行はほとんどスムーズで問題なくなってきた。「やなの！」という強い拒否の仕方も激減した。

III 期

場面間の移行の際に、現在の活動をまだ続けたい気持ちの時は、「やなの！」という次の活動への拒否の言葉ではなく、「まだ（今の活動を続けたい）」という前向きな言葉に変わってきた。また、「Drop Talk」を使つての活動の選択も明確にできるようになってきた。

【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

「やなの！」という強い拒否の言葉が減って場面間の移行が極めてスムーズになり、代わりに、「まだ」という肯定的な意思表示の新たな表出言語が増えてきたことに関する理論的裏付けとしては自閉症児に一般的な認知処理過程の特性である、①物事を時間的な流れに沿って把握するよりは、呈示された情報を一度に把握する方が得意、②聞いて理解するよりも、見て理解する方が得意といった背景の存在が考えられる。

すなわち対象児の場合、それまで場面間の移行を言葉だけの目に見えない形で指示されてきたのだが、それは理解しにくい伝達の方法であったことが推察される。「やなの！」という拒否の仕方は、本当の拒否の意思を表現しているだけでなく、わからなさから来る不安も含まれていたのではないかと考えられる。

それゆえわかりやすく見通しを呈示されることにより移行に伴う予期不安が減り、今の活動を続けたいという、「まだ」という言葉が素直に表現されるようになってきたのではないだろうか。

・エビデンス（具体的数値など）

二人の担任の印象でも、場面間の移行が極めてスムーズになったということである。

・その他エピソード（画像などを含めて）

二人の担任の印象では想定外の効果として、表出語彙数が増加したとのことでもある。